

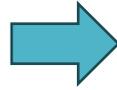
タイトル ふつうがいちばん？				
テーマ・目標 ふだん何気なく使っている「ふつう」という言葉をとおして、社会の中にある構造としての差別に目を向け、社会を変えるためには何が必要か、自分には何ができるかを考える。				
対象者／人数 ( ) / ( )人			日程・時間 目安の時間 60分	
時間	ねらい	場面／アクティビティ／問い		場の設定
1 10分	本日の研修の雰囲気づくりをし、本日のテーマに入りやすくする。	導入：自分の中のふつうを考える。 ①ふつうの中のふつうだ=100 ②「すごく変わり者で全然ふつうじゃない」=0 グループで自己紹介 ○「ふつう」ということでイメージすること ○なぜ自分が「ふつう」だと思うのか、または思わないのかという理由とともに自己紹介をする。		グループ <4~5人>
2 20分	「ふつう」であろうとすることでどんなことが起こるのか因果関係を紙に書いて分析する。	展開①：「ふつう」という言葉がさすものは、実はかなりあいまいであるが、わたしたちは「ふつう~する/しない」「ふつうがいい」「ふつうがいちばん」などと言うことがあるが、なぜ「ふつう」を気にするのかを考える。 ○ふつうであろうとすることでどんなことが起こるのか因果関係を模造紙に書き出し、個人で考えたことをグループで出し合う。 ○いくつかのグループに発表してもらい、全体で共有する。		グループ <4~5人> 【模造紙】 【マーカーペン】
3 10分	原因と結果の両方を考えてみて、気付いたこと・発見したことをグループで話し合う。	展開②：グループで話し合う。 ○気づいたことをグループで話し合う。 ○グループに発表してもらい、全体で共有する。		グループ <4~5人> 【模造紙】
4 10分	「ふつう」にひそむものを読んで考える。	展開③：「ふつう」にひそむものを読む。 ○状況シートを読む。 ○「ふつう」とは、どんな人/どういったことを表しているのか考える。 ○気になる点やひっかかる点をグループで話し合う。		グループ <4~5人> 【状況シート】
5 10分	研修を振り返り、今後の意識、行動の変容につなげる。	まとめ：振り返り ○資料「ふつうであること」を読む。 ○今日の学びをふまえて、これから「身につけたいこと」と「捨て去りたいこと」を考えて付箋に書く。 ①身につけたいこと(黄色の付箋) ②捨て去りたいこと(ピンクの付箋)		個人 【付箋】
準備物 ・付箋紙 ・模造紙 ・マーカーペン				

導入で使用したイメージ

自分の「ふつう度」を考えよう

「ふつうの中のふつうだ!!」 = 100  
「すごく変わり者で全然ふつう = 0  
じゃない!!」

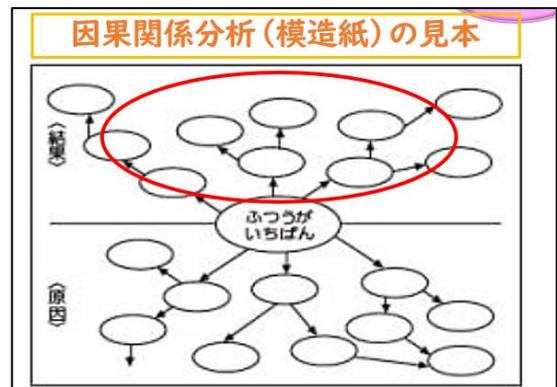
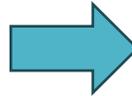
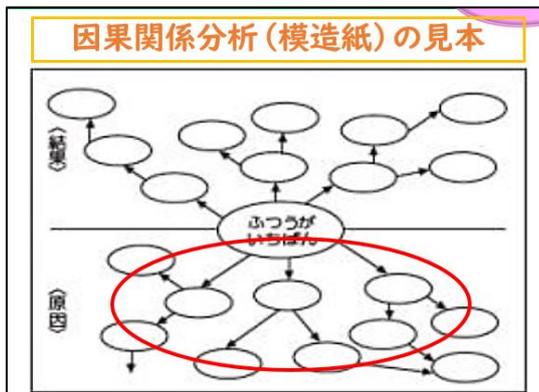
点数順に左前から並び変わって  
ください



ふつう度順に並び変わってください。

100	70
0	30

展開①で使用したイメージ



# 状況シート

## 状況 1

何人かで雑談をしていたとき、Aさんが同性愛者について差別的なことを言いました。それに対してあなたが「そういういい方はよくないと思う。性のあり方はさまざまなんだから」と言ったところ、Aさんに「もしかして、あなたも同性愛なの？」ときかれたので、「ちがうよ、私はふつうだけど」と答えました。

## 状況 2

Bさんは被差別部落（同和地区）の出身です。職場の人権研修を受けた帰り道、同僚に「実は、私部落出身なの」と話しました。それに対して同僚は「え、そうなの？ Bさん、ふつうだし、全然気付かなかったわ」と言いました。

## 状況 3

Cさんは知的障がいのある小学校6年生。一緒に過ごしてきたクラスの友だちと同じ中学校に行くのを楽しみにしています。あるとき、クラスメイトにからかわれたことがきっかけでパニックを起こし、教室の窓を割ってしまいました。ケガ人は出ませんでした。保護者会で問題になり、一部の人が「Cさんのためにも、ふつうの中学校ではない方がよいのではないか」と言っています。

## 状況 4

定食屋で昼ごはんを食べていたときのこと。

テレビから派遣労働者がD社でのセクハラ、パワハラを告発する裁判を起こした、というニュースが流れてきました。それを見た1人が、「知り合いがD社の社員だけど、話聞いてたらふつうの会社だけだなあ。裁判起こすなんて、ふつうの感覚だったら、ちょっと理解できない」と言いました。

## 資料 『ふつうであること』

---

“ふつうであること”は、差別しないで生きていくことの保証なのだろうか。“ふつうの世界”では差別が起きることはないのだろうか。“ふつうであり続けようとする”で「わたし」は差別しない人間として生きていけるのだろうか。

(中略)

一般的で、どのような状況や場面にもあてはまる“ふつう”など、どこを探してもない。“ふつうでありたい”という思いは、おそらくは常に私たちを捉えて離さないだろう。しかし、その思いのなかにある“ふつう”とは、世の中でいろんな意味や基準から考えて“外れている、あるいは外されている”人々や現実の“仲間入り”をできるだけしたくないという意志の表れなのである。

(中略)

“ふつうであること”は、決して私たちに“差別をしない”保証を与えるものではない。むしろ、そこに安住することで、世の中にある差別は、確実に生き延びて、育っていくだろう。つまり、私たちが深く考えることなく“ふつうに安住すること”は、差別にとってこのうえなく良い“こやし”となるのだ。

出典：『差別原論〈わたし〉のなかの権力とつきあう』好井裕明著、2007年（平成19年）より抜粋

発行：平凡社